

空間的降格

—— 現代フランスの都市最貧層にかんする歴史学的アプローチ ——

アンドレ・ゲラン
(中條 健志 訳)

中世において、また神学的観点では、貧者は神との仲介人とみなされていた。このため、貧民層は社会の中心にいる。14世紀から、彼らは公共の秩序を乱し、徐々に恐れられるようになる。やがて、17世紀からはガレー船、総合救貧院といった追放空間が、18世紀と19世紀になると貧者収容所が登場する。

現代では、抑圧は徐々に減少するものの、貧民層は空間的に降格している。彼らは都市の周辺に居を構えなければならない。こうした排除が現代の特徴である。本論では、この時代における社会空間的降格の重要な歴史的諸段階を分析し、その形態と要因とを関係づける。

I 都市の経済論理と最貧層の社会・空間的降格の初期段階（19世紀から20世紀始め）

A 19世紀における伝統的な都市居住形態の不適応化の増大

特にパリなどの大都市では、伝統的な建築は高層建造を特徴とする。エレベーターがまだ存在していなかった時代、どの階に居住するかは金銭的な豊かさに応じて決まっていた。最もアクセスのよいアパルトマンが最も高く、多くの場合、最も広がった。結果として、二階は高級な階、つまり高い地位の人々が住む階であった。そして、上階に上がるにつれて社会階層が下がっていった。文学はパリの建物の居住様式を表現するのにいそしんだ。ユージェヌ・シュアの『パリの秘密』（1842-1843）がその良い例である。たとえば、貧しい労働者であるモレルは、病弱な母を含む家族全員と最上階に閉じこめられている。いわば、社会的セグリゲーションは階層的な性質を帯びており、住居が上階にあることが社会的降格の基礎となっている。

古くからあるこの都市の19世紀におけるもう一つの特徴は、中心部に最貧層の住む不衛生な街区を抱え続けていたことである。パリ中心部に近く、他と比較して極度に高い罹患率でよく知られたサン・マルセル地区が、このことを立証している。

19世紀、地方からの移住者が都市に流れ込み、都市は稠密化し、拡大する。町へ来た人びとは、中心部に腰

を据えようとする。結果として家賃が高騰する。

パリにおけるまたもう一つの変化の要因は、第二帝政下のオスマンによる都市計画に関係している。首都中心部の不衛生な街区は、徐々に新しい建物の一群に取って代わられる。世紀を通じて行われた「オスマン様式」と呼ばれる新建築物への転換が、事実上、最貧民たちを都市周辺部へ「追いやった」のだ。

中心街に住んでいた貧民層は、より安い住居を求めて町から遠ざかるようになる。その反対に、ブルジョワ階級は仲間内での生活を志向し、貧民層を遠ざけるまでそれをやめないのだ。

B 排除空間としての都市：空間的降格の初期段階（19世紀から20世紀）

中心街から締め出された貧民層は、周辺部に居を構えなおそうとする。小説家ギ・ド・テラモンは、パリの景色の中にあるこの空間を、次のように描写している。「[...] 貧民街 (faubourg pauvre)、城壁跡 (fortif) まで続くいかがわしい通り、バ・メニルモンタンや、興奮し人びとがひしめき合っているベルヴィル、既にスラム (zone) の匂いのする廃屋が連なるサン・フェルジョーから上がっていく裏通り [...]」¹⁾。「他方ではまた、貧困の瘴気 (miasme) やバラックを思い起こさせる」²⁾。

要約すると、道は悪く、ごみが散乱しており、建てつけの悪いあばら家は安物の材料で覆われているために悪天候に耐えられず、家具がほとんどない代わりに木箱がいくつかあり、住民は痩せこけ、虚弱体質である。

19世紀のより後の方には、「城壁跡」の周辺で、最貧層の定住化が自然発生的におこる。1841年から1844年の間、アドルフ・ティエールの指導の下で、パリ市（1860年の定義におけるパリ³⁾）管轄区域全体を囲う新しい外壁が築かれた。この外壁はマレショー大通りと現在の環状道路の間に位置していた。この防衛建造物は、平和な時代になるとすぐさま使われなくなり、どちらかといえば社会から外れた人びとが歩き回るようになる。しかし、とりわけ「城壁跡」の境界線の外側には、かつて防衛軍の視界をよくするために設けられた約250mの幅の斜堤があった。つまり、この建築不可能な空間には、軍事防衛的な目的が想定されていたのだ。しかし実際には、この城壁の周囲にはすぐに最貧層のパリ住民、くず

屋、清掃夫たちが住みつくようになる。彼らはそこで生活するために板製のバラックを建てた。不潔さと不衛生さを特徴とする、その名ができる以前のまさにスラム街である。ウージェーヌ・アジェの写真が、この惨めな社会的現実を証明している⁴⁾。やがてこの場所は「ゾーン」という名前と呼ばれることになる。

まったく一時しのぎの状態の住居がそこに広がっていく。理屈の上では建物が建てられないゾーンには、掘って建て小屋や廃屋が建て込む。1912年の調査によると、約1万2千の建物があり、その大多数は住居である。そこに住む住民は数万人と推定された。

他の都市でも、このように荒廃した場所が現れる。人口増加と共に貧困は古い都市からあふれ出す。そして、貧しい周辺地域が拡大する。エミール・ギョマンの書いたかのモンリュソンの小トンキンは残念ながらよく知られている⁵⁾。植民地獲得のはじまりとつながり、スティグマ化をもたらすこの名称は、ヴィニールバヌのような他の工業都市にも見られる。

要するに、古い都市で中心部にいた貧民層が周辺地域へと出ていくことは社会的降格を、それ以上に、まさしく排除というものを証明している。周辺地域は実際のところ、同化せず、「異常」で、文明の外に押し出された人々が生き延びる余地を残した寛容の空間である。これはブルジョワジーにとっては脅威であるとともに、日々の平穏ともつながっていた。ナンシーのようなフランスのいくつかの都市では、貧しい住居が周辺地域へ移動した後には扶助行為が行われるのを見ても、これは結局のところ支配空間なのだ。

郊外化現象の出現に伴い、貧困は、最終的には悲惨な状態の人びとが生活せざるを得ない市街地拡張区域に広がる。その著作『郊外のキリスト』（1927年）の中で郊外の不良住宅を早くから詳細に調査したイエズス会の神父ランドは、互いに入り組んだ廃屋に言及し、それらを「ねばねばした長い毛虫の輪」にたとえている。彼は、この不安定な住居の特徴である不潔さと悪臭を遺憾に感じている。「害虫や微生物が汚物と混ざり合い、水や、燃料として使われる紙の吐き気を催す臭気が、胸をむかつかせる臭気がする板壁にしみ込む⁶⁾」。

結局のところ、こうした初期の社会・空間的降格は、スティグマ化、さらには社会的排除のあらわれである。

II 20世紀における差異の拒絶および社会・都市セグリゲーション

A 最貧層のスティグマ化

20世紀を通じて、最貧層とりわけ物乞いによる、時として暴力的な治安の乱れがおさまっていく。乞食行為

による有罪判決は減少する。1994年3月の新たな刑法もこの傾向を支持し、乞食行為は犯罪とはみなされないようになった。

20世紀、国の発展によってフランス人、とりわけ都市生活者の平均生活水準が上昇傾向を示す。つまり、年を追うごとに最貧民のスティグマ化が拡大しているということである。貧しさという異質性をもった存在は、徐々に逸脱者や、さらには規範に真っ向から逆らう激しく反社会的な人びととみなされるようになる。社会的に統合された階層と排除された階層とのあいだの差異という感覚が、都市空間においてますます可視化していく。

振る舞い、服装、生活様式による社会的差異が明らかにあらわれる。嫌悪という反応は、最貧民たちから感覚的に放たれるものに由来する。奇妙な服装、目に付く不潔さ、酔態が迷惑となる。それは聴覚的な感覚にも及ぶ。怒号、さらには言葉による直接的な攻撃などである。こうした最貧民たちのいかがわしい世界を特徴づける音風景は、嫌悪を生み出し、さらには排除をもたらすのだ。

「善良な人びと」のこうした態度は、ロベール・カステルの言う「二重」社会の存在に起因する。現代世界では、いくつもの社会が共存し、こうした分割が統合した人びとの反感をかき立てている。

差異の光景が常に不信と恐れを生じさせる。最貧層が被る空間的降格の基礎となるのは、このようなあらゆる反応である。

B 住所不定者を不可視にする試み

住所不定者⁷⁾は、我々の都市の路上でますます目につくようになってきている。彼らの振る舞いと行動はモラルを説く者の邪魔になり、距離を置かれることになる。ケズマン・ズッカ医師は『遠く』の中で、「不定住者は自身の分身でいられる可能性を捨て、根本的な他者性の中に、不快なものという自分自身の伝統的な居場所を見出すのだ⁸⁾」と鋭敏に書き留めている。統合した人びとは彼らを見えなくしようとする。新しい街路設備を作るとはゾーン居住者にそこに住みつくのを思いとどまらせようとするものである。

1970年以降の危機により、浮浪する大量の貧民層が再び路上に見られるようになった。放浪にかんする古い罰則を復活させるのは論外であったが、今度はターゲットを絞った「新たな弾圧」が登場した。国内の治安に関する2003年3月法は「攻撃的な」物乞いを罰するものである。

それと平行して、地方自治体が自らを保護する。こうして、1993年の夏にかの有名な物乞い対策の条例が登場したのだ。中央の政府もそれに遅れをとらなかった。19世紀と同じく、こうした浮浪する物乞いによって視界が妨げられるように見られる。たとえば、酩酊状態で

公共スペースに立ち止まる懇願者たちの姿が邪魔となるのだ。地方自治体の中には、さらに踏み込んだ措置をとるものもある。例えばニースは、1996年以降、中心街の浮浪者を強制的に大規模な周辺地域へ護送することで知られている⁹⁾。

C 空間的降格の抵抗的衰退

両大戦間、最貧層の空間的降格は部分的なものではなかった。確かにその多くが労働者ではあったが、郊外は最貧層だけでなく、統合された社会階層を受け入れていた。最貧層は、もはや都市に住めないとすると、多くの場合、不良住宅に居を構えていた。それでも、地区全体に貧民層が住むことはまだ珍しかった。

国土解放後に全てが変わることになる。住宅建設が数十年間停滞した後、移民労働力が大量に到着したことでフランスの人口は爆発し、フランスは1945年に住居の分野で厳しい問題を抱える¹⁰⁾。不動産財の4分の1が戦争によって破壊されてしまっていたのだ。結果として家賃は跳ね上がり、居住するための困難が激化した。

住宅にアクセスする手段のない最貧層は、周辺地域のまにあわせの住宅を利用せざるを得なかった。こうして、1953年9月9日のモロッコにかんするル・モンド紙の記事の中で、スラム街(bidonville)という新語が登場した。1970年のラルース大百科事典は次のように説明している。「北アフリカ、そして広義にはその他の国において、時として大規模な都市地区または都市近郊地区は、回収資材、特に古いドラム缶(bidon)の金属でできたバラックから成る」。1960年代半ば、フランスには7万5千人が集まる255のスラム街があった。ナンテールのスラム街では2万人を数えた。

1960年代から1970年代のあいだ、経済成長から利益を受けた国家は、このスラム街という厄介な問題を解決しようと試みる。1964年12月15日、不良住宅にたいするまさに戦争の一環として、ドゥブレ法が知事によるスラム街の住民からの土地収用を可能にした。その根絶にはかなり時間がかかったが、1966年、パリ地域圏には住民5万人以下の119のスラム街が残るまでになった¹¹⁾。第6次計画(1971-1975年)では様々な補足的対策が講じられた。1970年には、不衛生な住居を解消するためのプログラムが採用された。

その例として、ナンテール大学の周辺に置かれたいくつものスラム街の取り壊しが挙げられる。1971年6月、ラ・フォーリーのスラム街がものものしく取り壊された。従って、スラム街の一時的な終焉は1970年代に遡ると見なされよう。

にもかかわらず、20世紀の最後になってスラム街の再出現が確認された。ブラジルのスラム街(favela)と比べると、これらのスラム街は自発的なものである¹²⁾。

ソフィー・ランドランは、ル・モンド紙でヴォー＝アン＝ヴランのスラム街について言及している。これらの新しいスラム街にいるのは、主に東側諸国出身の人びとと、つまり、ロマ(多くの場合ルーマニアから直接やって来た人びと)やジプシーなどである。

この社会・空間的降格のプロセスを断ち切るために、1950年代末、仮収容住宅という方式が考案された。元々、公営の仮収容住宅は古い建物を最貧層に提供するために、その後、1954年にはアベ・ピエールの呼びかけに応じるために使用されていた¹³⁾。仮収容住宅には郊外のスラム街を取り除くという機能がかった。実際は、これらの住宅はフィルターのような役割を果たした。そこまで貧しくはない人びとが適当な住居に移ることを促したものの、それと同時に、社会的に降格した人びとばかりが住む街区を固め、さらには、それらを生成することになってしまったのだ。これらの集合団地には大家族が集まった。そこには、貧しい国からの移民だけでなく、産業文明とは無縁のフランス人達、典型例としては故郷を離れた農業労働者がいた。また、多くの欠陥者やその他の障がい者の姿もみられた¹⁴⁾。これらの住宅は、周縁層すなわち降格した人びとの近代性への適合を狙っていたのだが、実際には、取り壊しが決定するまで約10年間存在し続け¹⁵⁾、異常な人びとの再統合が失敗したことの象徴となる。

公権力は、社会住宅にかんする野心的な政策を実施しようとしていた。1947年に生まれた新しい低家賃住宅(H.L.M.)は、最貧層のニーズにはほとんど適合していなかった。それでもなお、国家は1960年代以降、H.L.M.の一部を、それまで劣悪な住居に住んでいた、多くの場合移民出身の人びとのために充てることに専念する。1968年10月1日の条例は、新しく建設されたH.L.M.の住居の6.75%をスラム街の住民に充当することを規定していた。2000年に発表された国立人口統計学研究所の調査によると、H.L.M.に住む世帯の18%が貧困線以下で生活していることが明らかになった。結果として、これら新たな住民たちの降格を回避する代わりに、H.L.M.のイメージが悪化してしまう。H.L.M.はもはや社会的上昇のしるしではなくなってしまったのだ!

1957年に、住宅問題を一時的に緩和するために登場した都市優先地域(ZUP)も依然として統合の意志を反映することはなかった。公権力は安い土地に整備工事を施した。このようにして、公営住宅が都市周辺地域に、つまりそれまでまさに無人地帯(No Man's land)だったゾーンに出現する。高速道路のインターチェンジ近くに設置されたZUPが最良の例である。これは重度の貧困問題の解決に貢献するはずだったが、少なくとも当初は、職に就くことで既に統合していた人びと向けのものだった。

第五共和制の下で、特に第5次計画（1966-1970年）に基づいて、国家は大規模な住宅政策に没頭した。そこで、周辺地域に住居を与えられた最貧層の強制移動が行われる。

この政策では、住宅団地の中間階級が出ていくという結果となる。そのことで、こうした場所に住む人びとは相対的に同質の社会階層で固まった。つまり、故郷を離れた地方出身者、様々な都市再生事業によって中心街から遠ざけられた貧しい家族、あらゆる出自の移民たちなどである。住宅団地は少しずつ最貧民、とりわけスティグマ化されたアフリカ移民たちの追放の場となっていく。ジャーナリスト、フランソワ・ボネの表現によれば、他の場所へ行くことのできない者だけがそこに残った¹⁶⁾。彼は、集合住宅とその住民を識別させるものは社会的悲惨（misère）であると付け加えている。

周辺地区の建設により、不安定で降格した地位の住民がそこに集中した。例えば、中規模都市であるサン・ディジェのケースは、この中心／周辺の二元性をよく表している。

1945年以降、最貧民の住宅問題は極めて深刻なものとなっている。栄光の30年の後に発表された1981年のオイクス報告は、不衛生な住居（スラム街、臨時住宅、仮設建設物、不良住宅、家具付きの貸部屋、仮収容住宅）の総人口を50万人と見積もった¹⁷⁾。

アベ・ピエール財団は、恐らくもう少し大きな予想幅があるであろうことを提示しながら、1999年に約500万人が劣悪な住居に住んでいると見積もった。財団は、最貧民のための住宅政策は「忍び寄るアパートヘイト」に帰着してしまったとみなしていた¹⁸⁾。

結局、社会住宅政策は非常に半端なままである。戦間期の遅滞のために、住宅におけるニーズは大きい。一般的に、国家予算は、植民地戦争の費用をはじめとした他の出費で苦しめられている。その上、国民全体が住宅不足に苦しんでいる時に、最も貧しい人びとのための大胆な政策を講じるのは難しい。未だかつて一度もみられなかった強い政治的意志が必要であろう。

19世紀以来フランスを特徴づけてきた社会・空間的降格は、食い止められなかったばかりかさらに進展してしまったのである。

注

1. G. de TERAMOND, *Les Bas fonds: Bouges et clochards. Romans des derniers Bas-fonds*, 1929, Ferenczi, p. 128.
2. G. de TERAMOND, *Les Bas fonds: Les parias. Romans de l'enfance malheureuse*, 1929, Paris, Ferenczi, p. 4.
3. 訳注：1860年1月1日の市域拡張により、それまでの12区から20区に再編された。現在のパリ市とほぼ重なる。
4. E. ATGET, *Les zoniers, album de photographies*, Musée d'Orsay/Gallica, 1913, passim.
5. E. GUILLAUMIN, *Baptiste et sa femme*, 1911, p. 307
6. Le père Lhande, cité par C. CANTEUX, *Le père Lhande et la banlieue parisienne*, maîtrise, Paris I.
7. 訳注：広義のホームレス。
8. S. QUESEMANT ZUCCA, *Je cous salis ma rue. Clinique de la désocialisation*, Paris, 2007, p.28.
9. A. GUESLIN, *D'ailleurs et de nulle part. Mendiants vagabonds, clochards, SDF en France depuis le Moyen Age*, Paris, Fayard, 2013, pp. 432-435.
10. D. VOLDMAN, *La reconstruction des villes françaises de 1940 à 1954. Histoire d'une politique*, Paris, 1997.
11. M. MARPSAT, J. M. FIRDION, (alii), *La rue et le loyer. Une recherche sur les sans-domiciles et les mal-logés dans les années 1990*, INED, Paris, PUF, 2000, p. 5.
12. B. BISSUEL, "Des taudis de banlieue qu'on croyait éradiqués depuis les années 1970", *Le Monde*, 28 novembre 2002, p. 10.
13. A. GUESLIN, *LES gens de rien. Une histoire de la grande pauvreté dans la France du XXe siècle*, Paris, Fayard, 2004.
14. H. PÉQUIGNOT, "La lutte contre la pauvreté", rapport du 20 septembre 1978 du Conseil économique et social, *Journal officiel*, 5 mars 1979, p. 382.
15. V. HUBE, "L'adieu aux Marguerites, dernière cité de transit de Nanterre", *Le Monde*, 16 juillet. 1997, p. 7.
16. F. BONNET, "La cité, lieu emblématique des nouvelles crises sociales", *Le Monde*, 18 Janvier 1996, p. III.
17. G. OHEIX, "Contre la précarité et la pauvreté. 60 propositions" rapport au Premier Ministre, février 1981, p. 75.
18. Rapport 1999 sur le mal-logement de la Fondation Abbé Pierre cité par F. CHAMBON, "La fondation Abbé Pierre dénonce le manque de logements sociaux", *Le Monde*, 14 mars 2000, p. 9.